こんやの光

無礙光の巻

御遺文

無礙光

無碍光とは一切能即絶對意志にして　一切の精神を解脱靈化して　終局目的に協力せしめて　如理の活動をなさしむる原動態なり。無邊光は般若即一切智慧態にして一切の個體を開展して　一切は此の光に依つて各自の智慧は絶對寫象即ち一切慧の個體發現なることを知る。

無碍光は阿彌の中なる個人をして阿彌の神的活動せしむる光にして　行爲に關する光なれば　道德的光明と名くべし。

經に彼佛光明無量照十方國無所障碍　故名阿彌陀。此光明即道德的世界秩序。光は絶對精神の屬性として清淨本然として　法界に周徧して　障碍する所なく　一切を世界依他起性の中より解脱して　神聖態に同化する所の勢力なり。

本來無礙光

絶對阿彌の無碍光は　所謂解脱の德大にして　處として融せざるなき勢力は　充滿するも　天然の人は依他性の爲に　繫縛せられて　自ら自由を得ず。自己の意志主我執著と世界依屬との天然規定の約束の爲に　一として自由あるなし。人は天然の主我主義ならば自由なることあるなし。身は是四大及び諸の物質元素の假和合物　心は受想行識悉く世界の因緣規定より成立せしものにて　世界の依他起を離るれば我なるものの有るなく　記憶寫象し來りし集起心をば一々物に還し　物質元素各本質に還し已れは遣る所これ何物ぞ。故に天然の人は　世界依屬の外に意志なき如き　實に果敢なきものにこそ。而して人は八識已上の眞心　即ち絶對阿彌の中なる自己なることを意識して　始めて世界依屬を脱したるのみならず　世界は却つて自己精神の一部分たることを意識す。

然も寫象して意識するのみにては未だ絶對阿彌の目的に契ふものに非ざれば　進んで世界を超越して　絶對阿彌の一切を終局目的に解脱し　靈化する無碍光の中に入りて　道德的行爲の光明に靈化して　阿彌の聖志實現として活動して　始めて阿彌の內容に致一したり。絶對聖意の個體現たる眞の價値あるものといふべし。

吾人は天然にしては　世界の一部分たる機制的動物なり。吾人は主我と肉團心と八識の一分たるものをのみ意識せば　實に世界の一分たる　機制心理個體にして　實に哀むべきものなるも　其最深の奥に自己本來絶對阿彌の個體にして　即無限なり。世界こそは　大我の一分たることを　楞嚴に微塵の世界も是自己妙心の所現なることを意識したる如くなり。

無上菩提

已に吾人は絶對阿彌の個人現なることを證しぬ。阿彌即ち無碍光の道德的光明とは如何なる態度にして　如何に吾人は意志が是の無碍光の活動なるやと知らんと欲す。此無碍道德的の光明は　即阿褥菩提心なり　阿褥菩提の本質は　道德態精神態にして本來法界に周徧す。一切を神聖正義に同化すべき精神態光明なり。

道德とは　其道德の衝動に數種の程度ありて　道心の階級によりて　最高等なる道德態なるも知るべし。例へば倫理的道德は天然世界動機主我執者にして　其衝動野卑なり。

また進んで三種の菩提あり。所謂聲聞の菩提緣覺の菩提佛菩提。二乘の菩提心は其主觀的方面には世俗人倫道心よりは遙かに超勝せるも　自利のみにして　利他即ち客觀を利する光なきが故に甚卑怯なり。無上菩提のみ圓滿なる絶對なる道德心なり。

無上菩提のみ　圓滿なる絶對なる道德なり。今非人格絶對の無上道德心態は　一切處に周徧す。其道德心態の光明は　精神態なる故に　見ること能はざるも　朝日の光りが無心に十方に朗なるに　暖氣を蒙むる故に　草木無情なるも　悉皆滋長する如く無碍の心光普く照して　衆生の意志を靈化して　神化して神明的活動せしむ。

無上道德心は絶對にして　已に阿彌の目的に歸入したる　精神內容に實現して　客觀世界に形はるなり。阿彌は無碍の光としては　無上道德心態となりて　內外に照曜す。絶對の光は主我を超越したる　阿彌の中に致一したる　精神內容に在て　而して活動の勢力は　客觀世界經過の中に形現して　道德秩序の行動として現す。

消極と積極

無碍光は十方に無碍にして　内外二界に實現する處の　道德的光明にして　此光に觸るゝ者として　益を得ざるはなし。此に二面あり　消極としては　衆生の一切の惡素質を脱却し　殊に行爲に關する處の　一切心的素質を消し　積極としては無上道心の靈態として　精神生活に勤めしむ。是心光は本然清淨にして　法界に周徧して　衆生の心機に實現して　活動するものなり。人の意志には　主我執と世界動機の繫縛なるも　この神聖なる精神態によりて　始めて無上道德心を開展して　世界的繫縛脱して無碍の絶對なる眞我と相應じて　我もなく佗もなく　惡は惡にして排除せざるべからず。此もなく彼もなく　善は善にして　行はざるべからず。

無上道心

無上菩提の本體は　絶對精神にして　一切を神聖同化する處の　勢力に外ならず。この絶對の無上道心態や　法界に周徧せる　理性態光明にして　無碍に衆生の精神の內界外界に周徧して　業に循ひ緣に隨て發現すべき本體なり。是一切衆生を終局目的に歸趣する處の勢力にして　一切に含蓄として　この絶對の自主觀的道德秩序として自律的に自利の勢力として　利佗としては　客觀的道德的秩序となりて　社會の中に光明のある　社會制度として現す。絶對としては　主觀客觀共に之を統一すべき　絶對の阿彌に實現す。元來無上道心とは　自もなく佗もなし。自佗彼我は衆生の妄情のみ。無我に行はるべき無上道心には　阿彌の聖意なればなり。

無上道心と云ふも　絶對菩提の內外二界に顯現なれば　上求菩提下化衆生　及び四弘誓願も同じく　絶對阿彌の終局目的に攝取すべき　勢力の各個人の顯現に外ならず

無上道心の性能

阿彌の性能を顯示せんと欲せんにこの性能の進化發達の階級の原始に遡る時は

天然の敎には　儒敎に天の命之を性と云ひ　性に率ふ之を道と謂ふ。道を修むる之を敎と謂ふ。朱氏は謂く「陰陽五行萬物を化し氣は形を成し理性は賦せらるゝこと命の如し。人は賦せられたる理を得て健順五常の德と爲る健是性なり。其自然の理性に循せば　其日用事物の間各當行の路あらざるなし。性道は同と雖も　而も氣稟或は異る。故に　過不及の差なきこと能はず。聖人人物の當行すべき法を天下に爲す。之を敎と云ふ。」道は須臾も離るべからず。離るべきは道に非ず。是の故に君子は其睹ざる處を戒愼し其聞ざる所を恐懼す。隱れたるより見はるはなし微より顯かなるはなし。故に君子は其獨を愼しむ。喜怒哀樂の未た發せざるを中と云ふ。發して皆節に中るを和と云ふ。中は天下の大本。和は天下の達道なり。中和を致し天地位し萬物育す。仲尼曰　君子は中庸をす小人は中庸に反す。君子の道は費にして隱なり。君子の道は端を夫婦に造す。其の至るに及びては　天地に察らかなり。子曰　道は人に遠からず。人の道を爲し　而して人に遠きは道とすべからず。忠恕。違道不遠。己に施して　而して願はざれば　亦人に施すことなかれ。誠なるより明なる　之を性と謂ひ　明なるより誠なる　之を敎と云ふ。誠なれば明明なれば誠なり。

唯天下の至誠能く　其性を盡すを爲す。能く其性を盡せは　能く人の性を盡す。能く人の性を盡せは　則能く物の性を盡す。能く物の性を盡せは　則以て天地の化育を贊くべし。以て天地の化育を贊す可れば　則ち以て天地と參なるべし。

其の次は曲を致す。曲なれば　能く誠あり。誠なれば則ち形に　形すれば則ち著し著しければ則明なり。明なれば則動く。動けば則ち變ず。變ずれば則ち化す。唯天下の至誠能く化するを爲す。又至誠如神の誠は自ら成るなり。道は自ら道びく。誠は物の終始。誠ならざれば物なし。是故に君子誠を之れ貴とす。誠は自ら己を成すのみ

に非す　物を成す所以なり。己を成すは仁にて物を成すは知なり。性の德なり內外を合するの道なり。故に時に之を措て宜しきなり。

唯天下の至誠　能く天下の大經を經綸し　天下の大本を立て　天地の化育を知るとなす。夫れ焉ぞ倚所あらん。浩々たる其仁。淵々たる　其淵浩々たる　其天。苟も固に聰明聖知にして　天德に達する者に非ずんば　其れ孰か能く之を知らん。

君子の道は闇然として　日に章に小人の道は的然として日に亡ぶ。詩に曰く　潛して伏すと雖も　亦孔だ之れ昭かなりと。故に君子內に省て疚しからず。されば志に惡むなし。君子の及ぶべからざるものは　其れ唯人の見ざる所か。詩に曰く予れ明德を懷て　聲と色とを以て大にせずと。子曰く　聲色の以て民を化するに於けるは末なりと。詩に云く德輕きこと毛の如し。毛猶倫あり　上天の載は聲も無し　臭もなし。至れるかな。

大學に大學の道は　明德を明にするに在り民を親するにあり至善に止まるにあり。

儒家　元より　天然敎たるを以て　天命又道と云ふも　未だ世界依他因緣所生の理なるを達せざるが　漠然たる概念に過ぎざるも大道を顯す階級たり　概念の內容には天地の懸隔ありと雖も其形式に於ては異なし。赤子も大人に於ても　支體の形式同じきが如し。

淳朴なる天然敎の道德の本質は　大道元氣なる天然界なり。天といひ　上帝といひ上天の載は聲もなく　臭もなき　大道の本質と　精神との分別も明ならず。唯蒼天に無上權威　自然に潛伏せる如くに謂ひ　自然の命令に率つて理性によつて道を行はざるべからずと信ず。

其至誠の本につきて行爲の點に於ては爾るべし。未だ大道の性能を明にせざるのみ進て超天然主義の大道心は　佛敎に於て三種の菩提　聲聞緣覺菩薩の菩提等　道に三惡道三善道。精神の業道三十七道品あり。

超然主義は　天然界の生滅の身心苦あり惑あり。この有漏天然界を超越して　無漏

の超天然界に入るに非ざれば　迷惑を脫する能はず。無爲界は超然として獨妙なり。彼岸には涅槃の峰高く　生滅の浪なく　菩提の覺月は皎潔として　獨り朗かなり。彼岸に致る三乘。

天然界は迷妄なり　罪惡あり　生死あり。一切罪惡の淵源菩提の巢窟。この天然界の自然の天命及び勢能に率ふときは　生死の苦を出で煩惱の累を脫する能はず。これを超越して　無爲涅槃の彼岸に到るには大道あり。道諦といひ　三十七道品なり。

七科あり。四念所　四正勤　四如意足　五根　五力　七覺支　八正道分となり　天然人の生活の精神は主我を本として　違順の境に惑し　業を造るなり。此の主我を斷ぜざるべからず。受る處は皆苦なり　身は不淨なり　法は無我なり　等進て從來の身見等の智力の惑を破り　肉欲我欲を斷じ　進て人間已上の樂を貪ぼるを非し　天然敎に謂ゆる　形氣の人心を除き去り　知も意志も悉く排除して　無意識になり。非想の少分の　自然の不識的意志も遣すべからずと。こゝに於て　天然即ち三界を超越したる　無爲自然界に度ると。彼の度る大道を道諦三十七道品又見道修道無學道なり。

緣覺は　生死の業道は十二因緣なり。是天然の因果規定なり。謂く無明行識名色六入觸受愛取有生老死　此天然規定を超越せんには　この十二因緣にて　因果規定を漸次に還滅せざる可からず。十二因緣は　天然生死の業道。眞理の彼岸に入らんには

この因緣の還滅の大道理を觀せざるべからず。

無上菩提の性能

法に約して釋せば　阿彌の大願とは　絶對精神の屬性　神聖正義恩寵の屬性ありて一切處に周徧して　一切を度する性能を無上菩提と名づく。法に約して無上菩提と名づく。

理に約せば法身藏性　即ち絶對精神には　絶對觀念と　能力とを有して　一切の個々を開展して　本體の終局目的に　歸趣せしむ性能なり。事に約せば　法藏の智より大願を發して　十方一切の衆生を智願力を以て攝取し度脫す。

無上菩提は　無上智慧正智見を開示して　正道に歸趣する勢力を　法に約して　菩提と云ひ　其他種々名をもて　絶對眞理の性理の性能を論ずるも　名に迷て實に種々の異體ありと誤るなかれ。

實を覓して論ぜば　阿彌の本體及び性能の外に　別に客體の勢能あるに非ず。無碍光の一切を開展して　阿彌の自己の中に　活動せしむるに於て　法に約して　無上菩提の語を以て　阿彌の性能を示すに外ならず。

無上菩提即絶對阿彌の性能は　自然に不思議の業ありて　眞如と共に　一切處に徧す清淨本然に　衆生の業に循ひ　緣に隨て發動す。無上道德の本質は　一切慧一切能即ち絶對理性と　意志との相合せる勢力にして　法界に周徧して　一切個々の精神を開展して　また理性をもて統攝し　一切を自己の目的中に活動せしめて　歸趣せしむる勢力なり。一切に徧在せるが故に　世界に含蓄せざるなし。

絶對道德勢能は　外界には客觀的道德秩序となりて　社會の制度として現はれ　內界には　主觀の道德秩序として　自律的に如實の行動と實現す。內外二界共に絶對の兩面に顯現したる　同一理性なれば　絶對終局には同一に歸趣すべし。

無上菩提の內容には　神聖正義と　恩寵との三屬性ありて　內界外界に於て　常恒不斷に一切を度脫靈化す。世界の正義には　絶對理性を實現する勢能にして　即娑婆

即淨土の道德の極樂を　顯現する勢力あり。

神聖態としては　世界には道德的地上の淨國を發展し　神聖なる世界と發現すべき理性能なり。

客觀的恩寵とは　法界緣起の道德として　人類を解脫し　恩寵と開展せしめ　無緣の慈悲を以て　一切を度脫靈化する特質に外ならず。

神聖態とは自體にあつては　義務を命ずる聖知なり。

正義とは正知見の衝動として　盡すべき義務なり。

主觀正義とは　自己の正知見によつて判斷したる眞實無僞なる理性態なり。神聖とは　理性の自ら道德律にかなふの道德行爲なり。

主觀的恩寵は　天然の自己を脫して　絶對の眞我に融合解脫靈化の態なり。神聖と正義とは　正因佛性にして　衆生性具の德なり。

恩寵は緣因佛性として能く　正因を緣け　解脫靈化して　了因佛性を顯現す。

神聖正義の絶對として　客觀界にも　主觀界にも　本來含蓄せるも　華嚴に所謂性起の德として　內部より發動すべき性能なり。

法界緣起の恩寵によらざれば　無明煩惱の爲に覆はれて自發する能はず。

因果不二

約理　法般解の三德　約法　無上菩提。此無上菩提の本體は　楞嚴に說が如く　因緣に非す　自然に非ず　和合に非ず　不和合に非ず。本如來藏妙眞如性　皆悉く淸淨本然として　法界に周徧せり　世界一切に含蓄せる理性にし　內に非ず　外に非ずして　而も內外あるに非ず。故に七大も　皆卽如來藏性にして　天然の性德を離れ　非を絕す　凡そ十界依正色心　悉く三德秘歲の全體大用に非ずと云ふことなし。

一切悉く是菩提　妙淨明の體　菩提の性能法界に周徧して　常恒に一切を度脫す。衆生及世界一切をして終局に歸趣せしむる性能を菩提を名づく。此菩提大道なり。此大道に緣らずして　終局に歸趣する理あるなし　此性能や生死を轉じて涅槃とし　煩惱を菩提に覺し　氷の水と成るが如し。

本體の內容に永恒自中存在し　本質內容の方面を無上菩提の本質は　常恒に顯動の方面に常に活動を呈して　一切終局に歸趣の光を與へ　一切を開展して　攝取して捨ず。この性能を菩提と名づく。是大道の元氣は幼稚なる天然敎にては天命　性に率を道といふ。そを圓滿に發展したるを　絕對精神態の菩提卽大道とす。この大道の勢力は　永恒不斷にして　この含蓄的性勢力が　主觀に發動すれば卽菩提心と名づく。

吾人の個體發動の菩提心と　絕對の本質とは　同一にして異に非ず。是大菩提は主觀にあつていかに發動するやは　是より證明せん。

昭和九年六月二十八日　印刷
昭和九年六月三十日　發行
（誌代年壹　圓）
編輯兼發行人　小石川區關口町六十五番地　山崎辨成
印刷人　小石川區關口町六十五番地　小林七太郎
印刷所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　靜文社印刷所　電話牛込五四一九番
ミオヤのひかり社　振替口座東京六六八五一番